

学校における「トイレの拒否現象」とその心理的原因に関する実証的研究

平尾 浩子

はじめに

近頃、テレビや、新聞で学校のトイレに関するニュースや新聞記事を見かけることが多くなった。生徒が学校のトイレを嫌い、あまり利用しないということが、社会問題にまでなっているというのである。生徒達の意見としては、「学校のトイレは汚い、臭い、暗い。」「だから嫌いだ。」「利用したくない。」ということである。そしてこのような意見を受け、全国で学校トイレの改装への取り組みが、異様とも言えるほどの高まりを見せている。それは、これらの物理的問題を解決すれば、生徒達が学校トイレを利用することになるというような認識が一般的だからである。しかし、本当にそうであろうか。物理的な問題を整備すれば、生徒達がトイレを利用しないという問題は全くなくなるのであろうか。このような疑問に対して答えるために、以下に述べる3つの研究（聞き取り調査、予備調査と本研究）を行った。聞き取り調査をのぞいて、研究について述べてみよう。

予備調査

1. 方法

本予備調査の目的は、大学生を対象に、小学、中学、高校時代の学校トイレに関して、どのようなイメージを持っているのか、又、学校トイレを使うことによって、どのような問題があったのかということをも明らかにすることである。

対象：本予備調査を行う際に、大学生306名（男子141名、女子154名、不明11名）を対象とし、以下の尺度を用いた。

尺度：ここで用いた尺度（以下、連想尺度とする）は、2項目によって構成される質問紙である。第1項目は「学校のトイレと聞いた時、何を連想しますか?」、第2項目は、「学校のトイレを使うことによって生じうる問題とは?」である。手続きとして、対象に思い浮かんだことを自由に書くように指示した。

2. 結果

まず、本予備調査のデータを分析する前に、第1項目に対する回答を、「非行」行動・出来事、「怪談」に関する側面、「空間としてのトイレの評価」（①否定的なイメージ、②肯定的なイメージ）、「トイレの要素」、「逃避としての場所」、「他者による否定的な体験」、「整理的なトラブル」、「思い出」、「その他」という9カテゴリーに分類した。

また、第1項目と同様に、第2項目を、「非行」行動・出来事、「いじめ」、「他者意識」、「設備に対する問題」、「利用した後生じる問題」、「逃避への場所」、「その他」の7個のカテゴリーに分類した。

次に、第1項目目における9個のカテゴリーと性別とのクロス集計分析を行い、その結果、有意差が見られた ($\chi^2[8] = 32.81; p < .000$)。即ち、男子における最も割合の高いカテゴリーは「空間としてのトイレの評価」である(19.1%)。第2番目の高い割合を占めるカテゴリーは「怪談」というカテゴリー(15.7%)である。さらに、男子の特徴としては、「他者による否定的な体験」のカテゴリーであり、女子(0.3%)に比べて高い割合を示した(4.1%)。一方、女子の場合、最も割合の高いカテゴリーは、「怪談」というカテゴリー(30.0%)であり、その次は「空間としてのトイレの評価」のカテゴリーである。(18.8%)。

第1項目の場合と同様に、第2項目目の7個のカテゴリーと性別とのク

ロス集計分を行った結果、有意差が見られた ($\chi^2[6] = 38.13; p < .000$)。即ち、男子における最も割合の高いカテゴリーは、「いじめ」というカテゴリー (17.3%) であり、その次は「設備に対する問題」のカテゴリー (12.4%) であり、第3番目に割合の高いカテゴリーは (10.2%)、「他者意識」のカテゴリーである。男子と異なり、女子における最も割合の高いカテゴリーは、「設備に対する問題」(25.6%)、「他者意識」(9.0%)、「いじめ」(7.5%)、の順番である。

また、クロス集計の結果 [性別×「空間としてのトイレの評価」(①否定的なイメージ、②肯定的なイメージ)] から明らかなように、男子と女子では、共通的な傾向として、学校トイレに対して否定的なイメージ (それぞれ、87.5%、96.4%) を抱きながら、それぞれの否定的イメージの内容が異なる。即ち、男子の場合は、学校トイレに対して、いじめの場所であるというイメージを強く持っているが、女子は、臭い、詰まる、不潔などの設備に関する否定的なイメージをいだいているのである。以上大学生を対象とした予備調査の結果に基づいて、主要な仮説をたて、以下の本研究を行った。次は、その方法的な側面と結果について述べてみたい。

本研究の方法と結果

予備調査から言える主なことは、生徒がトイレを利用しない理由は、トイレの物理的な条件によるものではなく、発達の要因による問題であろう。これに基づいて、トイレの利用に対して抵抗が大きいの中学生、特に男子であろうという基本的な仮説をたてた。本仮説を検証するために、以下の方法を用いて研究を行った。

1. 方法

対象：本研究を行う際に、小学生384名 (男子195名、女子189名)、中学生186名 (男子94名、女子92名)、高校生131名 (男子=59名、女

子=72名)、大学生306名(男子=141名、女子=154名、不明11名)の合計、1007名を対象にした。

測定方法：本研究において以下の2つの尺度を作成し、用いた。

- ①投影尺度：これはTATに基づいて作成したものであり、学校のトイレを連想される場所で、二人の生徒が何かをしている状況を描いた図版である。対象は、トイレに対する考えや体験を図版に現れている2人に投影するという想定に基づいて、その図版における風景について物語を作成するように対象に指示した。
- ②体験尺度：本尺度は「体験度合い」を測定するためのものである。投影尺度で対象者が作成した物語における登場人物(A & B)の体験のようなものを、実際に体験(間接的体験[友達、他人の])したかどうかを測るために、3項目から成る質問紙を作成した。第1項目目は、「あなたは、書いた話と同じような体験をしたことがありますか？」(直接的体験)という3段階項目(1=よくある；2=ある；3=ない)ということである。

2. 結果

投影尺度における全ての対象による物語の(AとBの関係についての)内容を書き出し、カテゴリー化した。まず、Aの行動内容については、「トイレをする行為」と「それ以外の記述」というカテゴリー(Aカテゴリー)に分類した。

同じく、Bの行動に関する内容も、「Aへの否定的影響」と「中性的な影響」という2つのカテゴリー(Bカテゴリー)に分類した。ここにおける「中性的」という意味は、否定的以外のものを含むものである。次に、

Bカテゴリーと「学年」とのクロス集計分析を行い、小学校の低・中学年、高学年、中学生、高校生、大学生の5つの母集団を比較した。その結果、こ有意な差がみられた ($\chi^2[8] = 181.8$; $p < .0001$)。即ち、相手に否定的な影響を与えることに関しては、最も高い割合を示したのは中学生 (51.1%) であった。その次は、小学生の高学年 (44.3%)、高校生 (43.8%)、大学生 (29.1%)、小学生の低・中学年 (28.0%) の順であった。また、中性的な影響を与えることに関しては、最も高い割合を示したのは小学生の低・中学年 (72.0%) であり、その次は大学生 (70.9%)、高校生 (56.2%)、小学生の高学年 (55.7%)、中学生 (48.9%) の順である。

さらに、「体験の度合い」と学年のクロス集計分析を行った。その結果。項目1「直接的体験」に関しては、学年の間に有意な差が見られなかったが、パーセンテージから見れば、最も高い割合を示したのは、中学生 (13.5%) であり、次は、小学生の高学年 (8.1%)、最後は小学校の低・中学年 (6.6%) の順である。同様に、項目2「友人の体験」に関しても有意ではなかったが、最も高い割合を示したのは中学生 (32.4%) であり、次は小学生の高学年 (31.4%)、最後は小学校の低・中学年 (21.9%) の順である。項目3「他人の体験」に関しては有意差が見られた ($\chi^2[2] = 5.99$; $p < .05$)。即ち、投影尺度の物語の「体験の度合い」について、最も高い割合を示したのは中学生 (43.2%) であった。次に高かったのは、小学生の低・中学年 (25.0%)、最後は小学校の高学年 (24.6%) の順である。

以上の結果に基づいて、投影尺度におけるAとB登場人物の関係に関して「否定的」な物語を書いた85人 (男44人、女41人) の中学生の対象のみを選択し、データを更に詳しく分析した。まず、B (加害者) の行動とそれに対するA (被害者) のそれぞれの反応をカテゴリー化した。Bの加害行動は、「直接的被害」と「間接的被害」という2つのカテゴリーに分類し、Bの加害行動に対する、Aの反応内容を、「積極的反応」と「受け身的反応」

に分類した。そして、これらのAの反応と、Bの行動のカテゴリーとのクロス集計分析を行なった。その結果、Aの反応のカテゴリーから見て3つのBのカテゴリーの間に有意な差が見られた ($\chi^2[1] = 13.600$; $p < .000$)。即ち、「直接的被害」に対して一番多い反応は、「受け身的反応」(47.2%)であり、「間接的被害」に対しても、「受け身的反応」(85.1%)が多かったということである。

さらに、「物語の結末」を「否定的」と「肯定的」なものに分類し、Bカテゴリー(被害)、Aカテゴリー(反応)、物語における「第三者への介入」の有無、という従属変数の間にどのような相関があるのかを、調べるために相関係数分析を行った。その結果、「被害」と「反応」の間に有意な正の相関が見出された ($r = .405$; $p < .0001$)。同じく「被害」と「物語の結末」との間にも有意な正の相関が見られた ($r = .326$; $p < .0001$)。しかし、「被害」と「第三者の介入」の関係に関しては有意な相関が見られなかった。対象の「反応」と「物語の結末」との相関は、比較的に高く、有意で ($r = .446$; $p < .0001$)、「物語の結末」と「第三者の介入」の関係に関しては有意な ($r = .624$; $p < .0001$) 正の相関がみられた。

次は、Bの行動に対するAの反応と、物語の結末(「否定的」と「肯定的」)とのクロス集計分析を行なった結果、有意な差が見られた ($\chi^2[1] = 16.9$; $p < .0001$)。即ち、Aの反応が「積極的」な場合、「物語の結末」は「肯定的」になる割合が高かった(18.8%)。又、Aの反応が「受け身的」な場合、「物語の結末」は「否定的」になる割合が高かった(57.6%)。

「第三者の介入」と「物語の結末」のタイプとのクロス集計分析の結果では、有意差が見られた ($\chi^2[1] = 33.138$; $p < .0001$)。即ち、介入者がいる場合は、物語の結末が「肯定的」になる割合が高い(18.8%)。介入者がいない場合は、物語の結末が「否定的」になる割合が高い(65.9%)。

総合的考察

教育現場だけではなく、日本社会にとっても本研究のテーマの重要性が否定できないことである。それにも関わらず、これに関する文献や学術研究がほとんどない状態である。そう言う意味で、本研究は、その方法論的な弱点にも関わらず、パイオニア的存在となれるのではないかと考えられる。本研究の結果に基づいて以下の主な諸点が考えられる。

①トイレの不利用の根本にあるのは、トイレの物理的状态よりも、トイレという社会的空間における、対人関係の問題である。さらにこれは教育現場における普遍的な現象ではなく、発達の現象、即ち、中学生という年齢層の特徴であろう。また、仮説と異なり、あまり性差が見られなかった。それは、投影尺度における登場人物AとBが、二人とも男子に見える可能性が高く、女子も男子も「男の子の世界」について物語を作成してしまった可能性があるからであろう。従って、今度は、登場人物の性別がはっきりわからないように描き直す必要がある。

②今後の課題として、実際に「学校トイレ利用」の体験者を対象に、深い面接を行い、本研究のような量的研究だけではなく、質的な研究や分析も必要である。

③本研究の結果から分かるように生徒は学校のトイレや、排便に対して否定的なイメージを抱いているので、様々な教育手段を用いて、このようなイメージを変えていく必要があると考えられるのである。